

# I 調査結果のまとめ

平成 28 年度の調査では、浜岡原子力発電所からの環境への影響は認められなかった。

## 1 空間放射線量の測定結果

### (1) 線量率 (14 地点)

#### ア 短期評価 (1 時間平均値)

旧監視センター、新神子及び小笠支所において平常の変動幅<sup>※1</sup> の下限を下回ったときがあったが、それ以外は全て平常の変動幅の範囲内であった。

#### イ 長期評価 (3 ヶ月間平均値)

平場、旧監視センター及び新神子において平常の変動幅の下限を下回ったときがあったが、それ以外は全て平常の変動幅の範囲内であった。

### (2) 積算線量 (57 地点)

薄原前及び芹沢において平常の変動幅の上限を超過したときがあったが、それ以外は全て平常の変動幅の範囲内であった。

## 2 環境試料中の放射能の測定結果

### (1) 浮遊塵の全アルファ・全ベータ放射能 (5 地点)

白羽小学校において集塵終了 6 時間後の全ベータ放射能が平常の変動幅の上限を超過したときがあったが、それ以外は全て平常の変動幅の範囲内であった。

### (2) 核種分析

#### ア セシウム-134、セシウム-137 (77 地点)

##### ① 陸上試料 (42 地点)

16 地点で平常の変動幅の上限を超過した。

##### ② 海洋試料 (35 地点)

4 地点で平常の変動幅の上限を超過した。

#### イ ストロンチウム-90 (15 地点)

全ての地点で平常の変動幅の範囲内であった。

#### ウ トリチウム

##### ① 大気中水分 (4 地点)

全ての地点で平常の変動幅の範囲内であった。

##### ② 陸水及び海水 (6 地点)

全ての地点で平常の変動幅の範囲内であった。

## 3 評価

一部の地点において人工放射性核種を検出し、平常の変動幅<sup>※1</sup> の上限を超過したが、浜岡原子力発電所内モニタの測定結果や測定系等の異常の有無、対照地点の測定結果などから総合的に判断し、浜岡原子力発電所の影響ではなく、東京電力(株)福島第一原子力発電所の事故（以下「東電事故」という。）や過去に行われた核爆発実験等による影響と評価した。

#### 4 参 考

東電事故等により放出された人工放射性核種の影響について、平成 28 年度の測定結果から外部被ばく及び内部被ばくによる実効線量を推定したところ、公衆の年線量限度 1mSv よりも十分に低く、健康への影響は心配ないレベルであった。<sup>※2</sup>

- ※1 東電事故前の過去 10 年間（測定期間が 10 年に満たない場合にあつては、測定開始から東電事故が発生するまでの間）の最小値と最大値の範囲としている。詳細については、平成 26 年度環境放射能測定結果評価方法に記載している。
- ※2 実効線量の推定結果は参考資料Ⅱに示した。